建築学科卒業生たより
芝浦工業大学
建築会

芝浦工業大学
工学部建築学科
設立60周年
記念特別号
2014.10.30
vol.30

1954－2014

SHIBAURA
INSTITUTE OF
TECHNOLOGY
The 60th
Anniversary of
establishment of
Department of
Architecture
30th Oct. 2014
vol.30

建築学科六〇周年記念事業開催に向けて

この六年間の建築会の取り組み

建築会 会長
鈴木泉（Izumi SUZUKI 一九八六年卒）

二〇〇八年年末に建築会第九回総会の承認を経て、石井敏明前会長より第五代会長を引き継ぎ、早くも六年の歳月が流れました。会長に就任するに当たり、今後の建築会の運営にどの様な方針を打ち出していくかについて、様々な先輩後輩からのご意見を拝聴させていただきましたが、その中で、学科入学同期のN君より、「建築学科は、昭和二九年（一九五四年）設立で、二〇一四年三月に満六〇年を迎える。それなのに、建築学科五〇有余年の歴史を俯瞰した資料はないらしい。そこを掘り下げてみれば？」という意見をいただきまして、それ以来、“建築学科六〇周年”が私の建築会会長としてのスローガンとなりました。

二〇〇八年末に会長に就任後、「総会が開催されない年も年に一度は建築会会員相互が懇親を深められる場をつくろう！」という主旨もあり、二〇〇九年を準備期間として、二〇一〇年に「建築会第一回同窓会」を開催し、二〇一一年末には建築会第十回総会（私の会長二期目が承認されました）を開催しました。そして、二〇一二年末には、建築学科六〇周年のプレイベントを意識して、“第二回建築会同窓会”を開催しましたが、今回の会報では、その時の記念講演を要約したものを特集号として掲載させていただいております。

また、この度は、二〇一三年より、一年以上の歳月を掛けて、本年十二月十三日に芝浦工大豊洲校舎において、建築学科主催の六〇周年記念事業を、建築会として後援する運びとなりました。記念事業は、第一部の記念式典と第二部の祝賀会の二部構成とし、第一部の記念式典を前半と後半に分け、前半は、多くの建築学科卒業生を直接指導されたOB教員の方々のご紹介と近況報告とし、後半はOBが期待する建築学科の将来像について、二〇代～六〇代の新旧の卒業生および建築学科の現役教員による座談会を開催する事としております。

さらに、第二部の祝賀会は、夕方四時頃から六時の開催とし、ちょっと早めに切り上げる事により、その後、各学年の同期会を開催していただければと考えております。各学年の交流が広がり、それが、建築学科卒業生全体の交流の広がりへと繋がれば、建築会会長としてこれほど喜ばしい事はございません。

六年前、私がスローガンとして掲げた“建築学科六〇周年”を、この度、学科主催という形で成就される事となり感無量です。また、その一大事業を、建築会会長として関われる事を大変光栄な事と感じております。

それでは、芝浦工業大学建築学科の益々の発展を祈りつつ、今後も、建築会の活動に邁進する所存にて、これからも、ご支援ご助力、よろしくお願いします。

【株式会社日新工営　勤務】

建築学科創設六〇周年記念事業
および第十一回建築会総会のお知らせ

本年十二月十三日（土）開催

＊詳細はP11をご覧ください

第二回同窓会記念座談会
建築学科創立六〇周年をめぐる光と影

パネラー
三井所清典（芝浦工業大学 名誉教授）
石川洋美（芝浦工業大学 名誉理事長）
加藤國雄（元建築会 会長）
枝広英俊（芝浦工業大学 建築学科教授）

司会
道田淳（建築会 副会長）

道　田　二〇一二年九月現在、建築会の会員は六八九〇名。その内卒業生が六八六四名で、住所が確定している方が約四三〇〇名ですので、約三分の二の方に毎年会報誌が届いています。学科創成期にまつわる歴史ですが、一九四七年から一九五五年に掛けて芝浦工業専門学校建築学科がありました。時期が重なってますが、一九五三年から一九五五年に掛けて、芝浦工業専門学校建築学科の夜間があり、その丁度中間の一九五四年（昭和二九年）に大学としての建築学科が設立されました。その後、今回皆様にお集まりいただいている建築学科のOB会である建築会が発足したのが、一九六七年（昭和四二年）です。

今回、〝六〇周年〟ということで同窓会を開催していますが、正式な〝六〇周年〟は、二〇一四年になります。それでは、何故、二年前からこのような大々的な企画を開催したかと言いますと、学科の歴史を紐解いていくと断片的な資料はあるものの、分からない事がいっぱいあるからです。例えば、創設期には、どんな先生がいらっしゃって、どんな授業をしていたのか？　学園紛争の時には授業はあったのか？　など、様々な謎を少しでもはっきりさせてみたいと思っています。ご挨拶が遅れましたが、私は、建築学科一九九三年卒の道田と申します。石川先生の研究室の出身で、現在、建築会副会長を勤めさせていただいてます。どうぞ、よろしくお願い致します。先ほど、先生方との事前打合せでは楽しい話がいっぱい出ましたので、皆さまにも追々ご披露できるかと思います。それでは、本日のパネリストの皆様、自己紹介をお願いします。

三井所　一九六八年から二〇〇六年まで教員として勤めさせていただきました。約四〇年の永きに渡り楽しい仕事をさせていただきました事、誇りに思っています。

石　川　今日は、「古い話をしろ」と言われてるんだが、年寄りになると古い話は覚えているが、新しい話は、相当覚えてないんだな。でもね、日が暮れて酒が入ると、色々と想い出すだよぉ。だから、今は、明るい内だから、道田から色々と言って貰わないと思い出さないと思う。また、会場から「そんな事ねぇよ！」とか掛け声が掛かると、「あ、そうだ！」と思い出すと思うので、今日は、よろしく！

加　藤　一九五四年から五八年まで大学に来ていました。また、九〇年から九六年まで、建築学科卒業生としては、初代。全体から見ると、二代目となるのですが、建築会会長を二期六年務めました。本日は、よろしくお願いします。

枝　広　まだ、現役ですので、学生やってるつもりで大学に残っておりますが、今日は、石川先生、三井所先生、私の恩師ですので、なかなか、言いたい事もまだ言えないと思いながらこの席にいますが、校友会の副会長、また、野球部の部長という立場でも発言していきたいと思います。

道　田　ありがとうございました。それでは、早速、全体像が分かっている様で分かっていない建築学科の歴史について話を進めて行きます。六〇年を三つに分けてお話出来ればと思います。まず、第一期を、学科が創設された一九五四年から学園紛争の直前の一九六六年まで。第二期を、学園紛争の一九六七年から、その後色々あるんですけど、バブル時代まで。第三期を、システム工学科が出来た一九九三年から、豊洲キャンパスが出来た二〇〇六年を経て現在まで。「豊洲の事なんか知らねぇよ」と、先ほど皆さんが仰って不安な気持ちになりましたが、豊洲移転以降、私と同世代の教員も勤める様になりましたし、あと二年でやってくる〝学科六〇年〟という点を踏まえて、パネラーの皆様にも今後の展望を最後に語っていただきたいと思います。それでは、一期は学科創設期にあたりますが、本日のパネラーの中では一番早く、石川先生が一九五八年に着任されています。学科創設期から赴任しておられたのが、非常勤で私も大変お世話になった、宮内嘉久さんのお名前も見受けられます。さて一九五七年までは、三浦元秀先生、嶺岸泰夫先生、浜田大蔵先生のお名前がお見受けできますが、当時、他にはどのような先生がいらっしゃったのか？　また授業内容はどのような感じだったのか？などのお話を学科一期生である加藤さんにお願いします。

学科創設期の教授陣
1954–1966

加　藤　ここに、一九六〇年の教員名簿があります。私は、数学の道に進みたかったのですが、高校卒業の時に、「これからの、建築は、数学が出来る人が行った方が良い。」と兄を指導していた構造設計の先生に言われて、慌てて芝浦工大を受験して、構造に進む事にしました。専門科目に入ってから当時の教員名簿を見て驚きました。構造で言いますと、東京タワーを設計した内藤多仲先生、武藤清先生、梅村魁先生、鉄骨では仲先生、シェル関係の授業では岡本剛先生など、本当の権威者が多く居て、「芝浦に来て良かったな」と、その時は安心しました。

その他、設備では、桜井省吾先生。計画系では、川島甲士先生、吉田先生、嶺岸先生。構造の浜田先生、小高先生等、先生は沢山いました。その先生方とお会いして、本当に勉強しましたね。これは、僕だけじゃなくて、当時、一期生というのは、何もなくてお金もなかったので、本当に熱心に勉強しました。だから、就職の時も、一学科八〇名でしたが、その先生方の紹介で、皆、望むところに就職出来ました。出来た早々なのに凄い学校だと思いました。今でも、その時、数学に行かなくて、芝浦に入って、その様な先生方と会って、勉強するクセを付けていいただいて、本当に良かったなと思っています。先生方も熱心で、二年の時からゼミナールがあったんですけど、ドイツの鉄骨構造の本を原語で勉強したり、授業以外でも面倒を見て貰いました。

加藤國雄氏

道　田　先ほど拝見した東京タワーの写真を見せて貰っても良いですか？　卒業の記念にご友人と一緒に昔の田町校舎の角で撮られた写真が、私は印象的でした。

加　藤　〝三丁目の夕日〟っていう映画に、この背景が出て来るシーンがあります。我々の時代は時期的にも、まさに〝三丁目の夕日〟の時代だった。そんな貧しい時代が、あの映画には、良く表われていたと思います。そんな時代が、私たちの四年間だったと思います。

道　田　東京タワーが貧弱に見えるんですけど、港区には見えないですね。足場もなければ何もなくて、二本の細いクレーンが立っているだけですね。私の在学当時は、田町校舎の近辺にはコンビニや食堂数件くらいしかなかったのをよく憶えています。加藤さんの時代の田町校舎近辺は、どのような感じだったんでしょうか？

加　藤　当時、私は下宿してましてね、毎日、弁当作ってもらって学校来てたんですけど、大概、お腹空くから、早く食べちゃうんですよね。ところが、この辺では食べる物があまりなくて、でも通りに、今川焼き屋があったんです。そこによく行って、空腹を満たしてました。

石　川　補足するとね、俺が芝浦就職したのが一九五八年。早稲田でね、今和次郎先生に「お前行け」って言われて来たんだよ。駅降りたんだよ。それで、駅の向こう側、慶応側にはよく行ってたんだな。ところが、こっち（芝浦口）は、降りた事もないんだよ。そしたら、昼間から人が道路で寝てるんだよ。「なんだっ！」と思ったら、芝浦ふ頭というのがあって、そこに外国船がいっぱい着いて、そこへ荷卸をするんだ。荷卸をすると、その沖仲仕っていうんだけど、その労働者がね、仕事終ってから酒を飲みに来るんだな。その酒を飲みに行くのが駅を出て左側の、臭いどぶがあったんだけど、その上に板を渡して、屋台を置いて、そこで酒を飲ましてるんだ。そこで悪い焼酎をかっ喰らってる奴等が、皆寝てるんだよ。それを避けながら学校へ行くんだけど、「えらいところへ来ちゃったなぁ。こんなところに学校あんのかよ！」と・・・。そしたらね、学校に入る前にある橋が木造なんだよな。こんな木造なんか、一晩経ったら壊れるぞ、と思った。それで、渡ると今の角の建物の中だった。この角の建物の一番上がペントハウスになってたんだけど、ここがね、建築学科の教員の溜まり場だったんだよな。それで、僕が入って、すぐ北校舎ってのが出来て、そっちへ移ったんだけど、加藤さん達がいる時は、まだペントハウスだよな。

加　藤　そうですね。鉄骨造で、スレートのね、四階建ての上に建った鉄骨造。

石　川　そのペントハウス、まさに一番てっぺんの、仮小屋のところに教員がいた。今、加藤さんが素晴らしい教

員達と言ったけど、確かに素晴らしいんだよ。これをね、集めたのが専門学校の教員に居た三浦元秀なんだよ。この三浦元秀っていうのはね、僕の先生の今和次郎の弟子なんですよ、実はね。今和次郎は、東京芸大から早稲田へ来て、早稲田のデザインコースの方をやっておられたんだけどね、今和次郎さんはね、なんていうのかな、割と貧しい人達の住宅とか、そういうのを色々と考えておられた。物凄く絵の上手い先生だったけどね、その弟子が三浦さんで、そういう活動を彼はやっていた。当時の新聞、昭和何年だかの新聞に、三浦さんが盛んにそういう活動を書いておられましたよ。それがどういう訳だかはわかんないんだけど、芝浦へ。松縄信太が引っ張ったとか引っ張らないとか言うんだけど、来ましてね、それで、「これじゃ、芝浦はダメだっ！」って言うんで、先生を集めたんだな。それが、東大系と早稲田系と二つから集めた。だから、大体ねぇ、各分野で東大系と早稲田系の教員がいるんだよ。

構造系では、梅村さんの同期生で東大の浜田大蔵、それと、小高照夫ってのがいてね。他にもね、池辺さんのところへ声を掛けてね、池辺さんのところから、嶺岸泰夫と吉田秀雄が来た。それで、早稲田系には、今和次郎に声を掛けて、川島甲士ってのが来た。僕も、今さんから声を掛けられた。

石川洋美氏

歴史系には、藤島亥次郎と今和次郎の弟子の加藤角一が来た。と、東大と早稲田を並べて入って来た。こう言っちゃなんだけど、新設の芝浦工大としては凄い先生がいた。加藤さんが仰る通りなんですね。そういった意味で、三浦元秀の役割っていうのは、物凄く大きいですね。建築学科をつくるに当たって。彼がいなかったら、今の建築学科は出来なかった。

それから、就職の事をやっておられたのは、本多次郎さんという方。彼は、東大からやって来て、材料系をやっておられたけど、この先生が本当に走り回って、学生を連れて廻って、当時はね、学生がお辞儀して廻って、毎日企業の挨拶廻り。「芝浦？　東芝の附属高校？」なんて言われちゃうような状況だからね。「そうじゃない！」って彼が廻ってくれたから、卒業生が皆就職出来たんだと、僕は思ってますけどね。それから、設備の桜井さんは、日本一の設備の大家ですよ。この人なんかもおられたから、設備の方も就職が出来た。それから、珍しかったのはね、デザイン系で、絵の先生がいたんですよ。芸大から来た高野先生っていうんですけど。当時は早稲田に絵の先生がいたんだけど、他にはいなかった。当時、大学の建築学科に絵の先生が居る大学なんて無かった。

あと、浜田さんの妹が絵の先生。白井さん、この人の弟がこの前の早稲田の総長の白井さん。芝浦工大の中に芸大出の絵の先生が居たのは珍しい。他の大学で、「そんな事があるの？」と言われるくらい珍しい事だった。

道　田　加藤さんは、数学から構造の道に進んだと仰いましたが、当時の大学ではどんな教育方針があったのでしょうか？

石　川　先生任せだったな。学科としてはなかった。俺が助手で入った時はね、加藤さんが卒業した後に入ったんだけど、教室は北校舎にあったんだけど、だるまストーブが助手の部屋にあったんだけど、そこが寒いんだ。

道　田　それは、昔の製図室ですか？

加　藤　いやいや、構造の先生達がいた部屋ですよ。内藤多仲先生が来てね、構造の授業をやっていました。

石　川　それは、俺も知っている。と、言うのは、俺の時は、デザイン、構造、両方やらなければダメで、構造系の卒業論文は内藤多仲だから良く分かってるんだ。そんな事はいいとして、学科方針ってのはなかった。でも、各科目でね、俺はデザイン系で入ったから良く分かっているんだけれども、嶺岸さん、吉田さん、沖種郎さんって言うのが東大にね。早稲田からは、川島甲士がいて、だから俺は喜んで入ったんだけど、古い人は知ってるんだけど、これは五期会っていうね、建築の若手の運動家達の会で、大高さんとか、菊竹さんとか入っていた。その連中の一団がいたんですよ。それが面白くって入って来た。そういった割りとユニークな七〇人くらいからなる集団がいたんだが、それを集めたのが三浦元秀で、田町の新しい方の校舎、無味乾燥なあの校舎、その設計者なんだ。徹底して装飾をとことん嫌った建築家で芝浦校舎を設計したんだが、あのさっきの玄関の写ってたあの校舎、一九五五年の空襲で火に包まれた時に、三浦さんは学生六名と一緒に火を消して廻った、という逸話が残っている。で、その時、彼の阿佐ヶ谷の自宅は全焼したのに。そういったね、この芝浦工大の建築学科を語るのに三浦元秀って人は、忘れちゃいけない人だ。

道　田　ありがとうございます。もう一〇年くらい経たないと、歴史の中では三井所先生も枝広先生も登場されませんが、一九五八年に清田先生、その後、相田先生が一九六一年に赴任されています。で、私のメモでは、一九六六年に石川先生がいらっしゃった建築学科と沖先生、相田先生がいらっしゃった建築工学科に分かれています。私達も、どうして昔から建築工学科と建築学科に分かれているのかわかりませんでした。なんとなく当時の私達（一九八九年から九三年）には、建工には、藤井先生、相田先生、三宅先生がいて、建工は良きライバルという見方でした。その辺の分かれた経緯がよくわかりません。それまではクラスが、さっき加藤さんの話とは行き違うんですが、加藤さんの話では八〇名という事だったんですけど、先ほど石川先生が仰られていたのは、一クラス四〇名・・・。

三井所　文部省で決められていた定員が四〇名だった。

道　田　学生数が増えすぎたから単純に分かれたんだ、ということでしょうか？　さきほど石川先生が「ジャンケンで決めた」と仰っていましたが、その辺のお話をお聞かせ下さい。

石　川　文部省に申請していた一クラスの定員は四〇名だったんだが、加藤さんの時、一クラス八〇名だったのが、今、理事長やってる五十嵐の時には定員四〇名なのに二〇〇名入って来た。それを学生達が騒ぎ出してね。

三井所　一クラス一〇〇名で、学年で二〇〇名？

石　川　その通り。「少人数教育と思って来たのに、一学年二〇〇名とは何事だっ！」と言う事になった。「そりゃあ、そうだよなぁ」と、俺達教員の方も、あまり最初は気にせずいたんだが、その内に、「先生も言ってる事が違うじゃねぇか！」「そんな事はねぇ！」と言い張ったんだけど、「それじゃあ、違う学科をつくろう！」と言う事になって、それでは、同じ学科を二つ作ってもしょうがないから、一つを技術系にして、もう一つを意匠系にしようという話になったんですよ。ところが、構造系の浜田大蔵と小高照夫が、まあ仲が悪かった。そこで、デザイン系も分ける事になって、嶺岸さん、吉田さん、沖さん、相田さん、石川、江口でジャンケンして、負けたのが相田と沖。相田と沖に、卒業生だからと江口も付けて、建工に行く事になった。

道　田　負けた方が建工ですか？　そこ大事ですね（笑）。

石　川　相田さんは、「建工なんかに行きたかねぇ」と言ったんだけど、「ジャンケンで負けたんだから、とにかく行け！」と言う事になった。今日、相田が来てるから聞けばよいけど、「そうだ！」というだろう。他の分野は知らないけれど、デザイン系はジャンケンで決めた。そういう、つまんない事で分かれた。さっき話が出た、三宅くんは後から来た。

道　田　永年、皆さんが聞きたかった謎が分かり、収穫がありました。さて、その後、六六年から学園紛争に入って行きます。石川先生がいらっしゃった五八年頃から比べると、建工が出来てから学園紛争までの大学の雰囲気はいかがでしたか？

石　川　五八年に来た時は平和なもんだった。ただ、困ったのは先生達が学校に来ねぇんだよ。それで、俺達助手が代わりを務めていた。デザイン系では、俺と佐粧さん。

加　藤　石黒先生の奥さん。

石　川　そう！　そういう風に平和にやってましたよ。でも、六七年の暮れにおかしくなった。というのもね、ひとつの原因が大宮校舎の開校なんですよ。あれは、国鉄操車場の跡地であって、鉄道会館から用地を買って、どの学科が行くか？　と言う事になったんだけど、建工は、「大宮なんかに行きたくねぇ！」って事で、ついに大宮へは行かなかった。キャンパスまでは泥んこの田圃道を歩いて行かなくちゃ行けないんだ。雨の日なんか、長靴履いてなきゃ行けない。これは酷いと言う事になって、工業経営と機械二科が大宮に行ったんだけど、その工業経営の学生が全学闘の委員長をやっていたんで、大宮で火種が広がり、バリケードを東大宮で組んだ。それが、ビラを剥がしたとか騒動になった時に、芝浦の学長室の前に座り込んで動かなくなった。そうやってすったもんだしている内に学生側の火が燃え上がって、外でバリケード組んじゃった。そして「教職員出てけ！」となった。それが、六八年の正月なんだ。そうすると、もう入試なんだよ。このままじゃ、入学試験が出来なくなる。入試が出来ないと大学潰れるんだよ。で、どうにかしなきゃなんないっていうことになり、俺はまだ専任講師のペーペーだったんだけど、そのペーペーと学生達が話し合って入試やる期間だけバリケードを外した。それで入試だけは出来た。ところが、またおかしくなって、第二次バリケードが出来た。それが、私設機動隊まで出て来て学生側とすったもんだやり、運動部の学生達まで出て来て、もうしっちゃかめっちゃかになっちゃった。それで、文部省から補助金ストップと言うところまで来た。

学園紛争からバブル時代まで
1967–1992

道　田　ありがとうございました。話もすごい勢いで第二部に入りました。六七年に芝浦の卒業生である小柳津先生が着任されてます。そして、六八年に三井所先生が着任されています。私の手元資料では六八年一月の理事会で、学費の値上げを発表した後に、全学連闘争委員会が結成され、二月から大宮キャンパスでスト突入、続いて、田町校舎のバリケード封鎖。もし学科の歴史に〝光〟と〝影〟があるのであれば、この辺りが、一番〝影の時代〟だったのかも知れません。そして、七二年に枝広先生が着任されています、そして、七四年にバリケードの封鎖が解除されている、と出ています。先ほど、三井所先生と枝広先生に、「六八年から七四年までバリケードがあったんですよね？」と聞いたら、「そんな事ないよ」と訂正されました。やはり話はどうしても大きく伝わってしまうようです。三井所先生が来られたのは、六八年四月以降だそうですが、先生から見られた当時の大学というものは、どの様な状況でしたか？

三井所　私が来た時には、初めは何もなかった。平和な状態でした。さきほど石川先生から早稲田系の先生と東大系の先生が居て、それぞれ非常勤の先生も居たという話を聞いて、「なるほど」と思ったのですが、私、そういう事を全く知らないで就任したんですね。五八年、加藤さんが卒業なさった頃、私は駿台予備校に通っていました。そして、東京タワーが出来た頃、五九年に大学に入りました。加藤さんとは四～五年の違いがある訳ですが、若い人には“五年くらい同じじゃないか”と思うかも知れませんが、戦後の復興期、その頃の四～五年の違いというのはえらい違いでした。世の中が急速に変わって行く時代であって、建築技術の方から言うと、加藤さんの学生時代にコンクリートでつくる風潮っていうのがかなり強くなってですね、コンクリートの建築教育というのが始まったと思うんですね。私が学生の頃は、セメントの扱い方とか、砂利、砂の練り方とか、鉄筋の保管の仕方とかね、そういう事を凄く丁寧に教わりながら、鉄筋コンクリートの授業を梅村先生から教わったりしました。そういう時代なんですけれども、一九六〇年に八幡製鉄がH型鋼をつくり始めたんですよ。それで、一発で柱型、梁型が出来る様になった。本当に鉄鋼が使えるようになったのは、それ以降という感じで、それまでは、小さな部材をビルドアップして柱型、梁型をつくるのがそれまでの鉄骨造だったんです。一発で柱型、梁型が出来るという合理的な生産が始まったのが六〇年頃なんですね。コンクリートも、住宅を含む一般的なものは、五〇年代後半、ブロック造から始まった。コンクリートブロック臥梁構造というのがあって、そういうものがやっと、住宅や一般の建築に使える様になった。五〇年代前半までは、戦後の産業の復興のためにあらゆる資材がそちらに向けられますから、一般的な建物には資材が廻って来ない、という時代です。そういう時代に、加藤さんは勉強された。「これから、コンクリート行くぞっ！」という様な時代ですよね。それで、私は“木造は禁止”といわれた時代に大学に入って行くんですよ。もう、コンクリートでしかつくらない。鉄骨もやっと建築に使える様になった時代ですから、鋼構造の仲先生、凄い鼻息荒い。武藤先生を引き継いだ梅村先生も時代の寵児ですよね。

　そういう先生方がいて、一方では、先ほど、池辺先生という名前が挙がったけど、建築の工業化、合理化、国際化をちゃんとつくんなくっちゃいけない、っていう事を言い始めた時代です。ただ、形があって、表から裏までコンクリートで、表面にモルタルとか白いセメントとかを塗るだけで終わり、っていう感じじゃなくってね、ちゃんと性能を確保しなくっちゃいけない、っていう事を言い始められた時代。

　一方で、そういったものをやっと、ちゃんとつくれる様になった時代。そんな時に、私は、勉強をしてまして、大学卒業は、小柳津先生よりも、一年早いんですけれども、大学院に五年間居ましたので、そこでは、工業化の研究をしてました。集合住宅を、いかに工業化して行くか？という事をやって、その研究的な設計まで、研究室の中でやってました。

　内田祥哉先生のもとで、大学院時代に、色々新しい時代の建築の設計をしなくっちゃいけない、それがひとつの役割であったんですけど、その集合住宅を中高層の設計、鉄骨で超高層まで設計するという事を研究的にやってました。

三井所清典氏

　一方ですね、私は、一九六三年に卒業して、原広司さんが大学院の最上級生に居たんですけど、RAS建築研究所っていう設計チームを大学院の学生でやってまして、一番若いマスターの一年で仲間に入って、原さんと香山壽夫さんと宮内康さん、構造は岡田恒男さんがメンバーでした。私は、設計大好き人間だったので、RASを支える人間になろうと思ってました。そういうドクターコースの最後の時にも、就職活動は全然してなかったんだけど、二月くらいに指導の内田先生に「芝浦で設計の先生を求めているんだけど、行く気あるか？」って言われて、「芝浦って、設計をやってる先生がいっぱいいるところですね？　大学の先生で設計が出来る、っていうのは凄く嬉しいから、そこに行きます！」と言ってしまったんですよね。ですから、設計をしながら、大学の教育もやる、っていうのが芝浦なんだと理解していたんです。

　でも、さっきの話を聞いて、石川先生が仰った「東大系と早稲田系」っていう背景があったのか、薄々感じ始めながら物を言い始めているんですけど、初めて言う話もあると思いますけど、私を面接してくれたのは、吉田先生と嶺岸先生でした。「私は、原さんが東大の先生になってしまったものですから、僕はRASの社長をやらなければならないんですが、それでもいいですか？」って聞いたら、「設計やってる方がいい。芝浦では設計と学問を繋ぐ事をやってます」と言われて、先ほど話した「ビルディングエレメントの研究や工業化の研究をやってます」って言ったら、「是非、そういう事を教えて欲しい」と言われました。それで、設計の教員として六八年に芝浦工大に赴任しました。

　当時は在学生に、毛井先生と衣袋先生が居て、驚いたのは卒業設計の凄さです。さらに、一週間の短期設計が毎週ある。設計の訓練が凄いと思ったんだけど、毛井先生の卒業設計は、本当に凄かったよ。それは、凄い人達が学んでいるところだな、と思って、ここで教えられる事の喜びをつくづく感じました。毛井先生の卒業設計なんかは、私も卒業設計賞をいただいたけど、私よりうまい。東大は、論文もやらなくっちゃいけなかったから、芝浦ほど卒業設計の密度が濃くない。ですから、六九年卒業の毛井先生の時代は、比較的、平穏だったと思いますが、四年生の時に闘争が始まってました。私が着任した時は、私も若かったので、ゼミの時、三年生が二五人程いる中で、研究室に全員入りきれない程だから、私がいるのに、同じ様な格好をしているものだから、「先公、まだ来てないな」なんて言われたりしてた。だから、三年生のゼミも始まったんだけど、秋くらいかな。そんな感じです。

道　田　ありがとうございます。先ほど鉄骨とかコンクリートなど工法の話が出ましたが、六七年に枝広先生が入学されてます。それで、七二年に着任されてるんですが、枝広先生の中では、三井所先生とどのくらいの差異があるのでしょうか？

枝　広　ちょっと喋りずらいですけど。今、三井所さんが仰られましたけど、私が二年の時に三井所先生がいらっしゃられたんですけど、その時の三井所先生の印象は鮮明に覚えています。若くてですね、「こんな若くて先生になれるのかなぁ？」っていう様な感じで。まぁ、三井所先生の印象っていうのは、声は大きくないけど授業が長い、っていう印象は、物凄いありましたね。終わりそうで終わらない、っていう感じが。

道　田　僕の時もそうでした（笑）。

枝　広　まぁ、その時の話で、紛争については、大学一年の後期の試験の時だったと思いますが、私も学内寮に入っていましてですねぇ、皆担ぎ出されて“おにぎりがタダで食える”と。その時は、仕送りも少ないし、学内寮に入れば月二千円くらいあれば生活出来ました。朝ごはん食べても、四千円もあれば、生協で五〇円くらいで朝食、食えましたから、「皆飯が食えるぞー！」って言って、「学内寮の連中、全員出て来い！」っていう様な雰囲気で、大宮校舎の二号館、事務棟の階段の方に座り込んだのは覚えていますが、私はそれ以降、紛争にあんまり賛成じゃなかった。っていうかノンポリの方でしたので、ひたすらサッカーを、真剣にやってましたんで、グランドの方に行きまして、ただ栄養付けていただけです。

　それで、二年の時は、もう紛争だらけで、三年も紛争だらけで、だから、先生方から単位を貰うために、レポートとそれから掲示板に、たまに“いついつ試験やるよ。レポート出せよ”という告知がありました。まぁ、数回は授業もありましたけど、後は、全部独学で、アルバイトやりながら勉強してました。学生紛争も、私が四年生の時は、ちょっと沈静化してですね、その時に、三井所先生の研究室は、今の“材料施工研究室”が、“建築生産研究室”と申しまして、その後、三〇年間くらいご一緒させて貰った訳ですよねぇ？

三井所　ちょっとだけ、そこ補足するとね、嶺岸先生と石川先生の間に、第五研究室という小さな部屋を貰って設計の教員として赴任したんですが、紛争が起きてですね、学生達がどんどん問い詰めるもんですから、いたたまれなくなる先生が多かった。藤島該次郎先生が、すぐに辞められたんですけど、その後、設備の先生とか、一般構造の先生が辞められて、それで、“その教育、誰が引き継ぐか？”という事になって、人を採用する状況でないものですから、計画の先生たちが、ジーッと私の顔を眺めながら、「三井所くんは、構法の研究をやってた卒業生だよね」と。東大で言うと、内田先生の研究室は建築構法をやってたものですから、一般構造も出来るんじゃないのという事もあって、「一般構造をやりませんか？」という話になったんです。「私は設計を教えるために芝浦へ来たのに、構法の先生ですか」と、ちょっと抵抗はしたんですけど、「それじゃあ、建築生産っていう名前を付けて研究室を始めるという事でいいですか？」という話にしたんです。それは、建築は、企画から設計をして工事をして維持管理をして、それで初めて建築になるので、設計と工法とか、そういう狭い範囲じゃなくて一貫して物を考えるような研究室をつくりたい。それで、生産研究室という名前を付けて、私は密かに設計も出来るんじゃないかと考えて、設計もそのプロセスに入りますから、そういう事も意識しながら建築生産研究室と言って、材料も工法も一緒にやれる、しかも、工業化工法もやる、建築生産研究室をつくることで私も賛成して移りました。

枝　広　補足していただいて、ありがとうございました。当時私は一年間現場監督やってたんですが、皆さんが一斉に辞められた関係もありまして、ちょうど田町の反対側の高輪で現場監督やってたら、辞表出して帰って来い、という様な雰囲気になりました。そして、助手として帰って来る事になったんですが、一五年間くらい続けましたですかね。ずーっと、メンバーが二一名くらいの専任教員がおりまして、芝浦の先輩の方々が、ちょうど三〇代、四〇代になって行く間、ずーっとその調子で二〇年間くらい私の後任がいなくて、ずーっと一番年下で、ピラミッドを逆さにした形で、歴史の藤澤（彰）先生が来るまで、入れ替わりが殆どありませんでした。辞めていく先生はたくさんいらしたんですが、私の後がいない。

　当時、清田先生、小柳津先生、毛井先生、衣袋先生、小坂先生、上村先生、それから私の同期の林先生が助手としてですね、それから、金丸先生がいらっしゃいましたね。大変、多くの助手の組織の中で、最初は、一年生のプレゼミとか、二年生の八王子ゼミとか、そういう準備を若手でどんどん企画して、毎年企画が変わる、泊まるところも変わる、という事でブツブツ文句を言いながら、一緒になって酒を飲んでました。特に石川先生は、いつも、二時、三時まで平気でお酒飲まれていました。石黒先生もで

枝広英俊氏

すよね。大体、朝、学生のところに行くと、目を真っ赤にして、酒臭かったのを良く憶えています。

道　田　ありがとうございます。枝広先生が、六七年の入学で、七二年に先生として着任されてますので、ちょうど紛争の時は、授業受けたくても受けられなかったとかいうことも沢山あったと思うんですが、学生側の気持ちとしては、どんな感じでしたか？

枝　広　私は、建築と建工が分かれた二期目なんですね。大宮校舎が出来て二期目なんですが、やはり、クラスが二つでしてね、一クラス一三〇名くらいでしょうかね。二クラスありましたから、私らの同級生は、二六〇名くらい。先生方は、同じ講義を週二回やられてました。だから、教室もいっぱいですし、それと数学とかの一般教養の授業は凄い数で、マスプロ教育の典型だったのは憶えています。とにかく、学生時代の思い出というのは紛争に明け暮れて、私も測量事務所とか、三年生の時は、ハンドボール部OBで助手だった佐藤宏輔さんの元で、最初はお抱え運転手みたいな事をやってました。確認申請と現場監理。元々現場は好きでしたから。

私の恩師は、先ほどから出ない先生で言えば、生産系では、亀田泰弘先生という建設省の材料施工部門の室長だった先生と、それから、当時、大成建設で、その後、工芸大学の教授になられた加賀秀治先生。それから、金高慶三先生は、ちょうど高度経済成長期で大阪万博のネットワークの責任者で、大成建設ですよね。それで、大阪万博に連れて行って貰って、私も、「ネットワークっていうのはこんなに面白いもんか」と思って、それが一九七〇年ですから、その三人の先生に教わって、非常勤ではあるんですが、色んな世界があるんだな、と世界が広がりました。

大学四年の時は、新大久保にあった建設省の建築研究所、当時、近いし、これはもう時効だから言いますけど、卒論やりながら、毎日、二千円ほどアルバイト料と称していただいて、椎名町に、鹿島建設が施工した高層RCアパートに数年間行きました。当時助手というのは・・・、これ言って良いのか？　ですが、勉強を兼ねて鹿島建設に行かせていただいたんで、その後に、ずっと芝浦で非常勤やっていただいていた依田彰彦先生とか、柿崎正義先生とか、当時、鹿島では強者と言いますか、当時、学会でも材料施工部門ではかなりの強者なんですが、その方々と知り合えました。それでさらに、一〇年くらいして、口のうるさい先生が沢山おりましたので、正直言って、助手をやってて、「早く辞めたら？」なんて何回も言われた覚えがあります。それで、魅せられた研究を続けているうちに私の研究室には、ゼネコンに行きたい連中が集まって来ますので、「面白いんだよ、面白いんだよ」と誤魔化しながらお酒飲ませたりしてました。そういう風にやって行くと何が起こるかわからないし、自分の夢が広がるかも知れないし、「まずは、やってみな」という基本を鹿島で学んだというのが事実かも知れません。

道　田　ありがとうございました。

三井所　ここに、七二年卒の人はいますか？　枝広先生が七一年なんだけど、一年後輩。

水　口　私は、卒業したのは七三年ですが、遅れたんです。私は順調に行けば七二年卒業なんですが、ジャズの方に投入したんで、軽音楽部に。六年間大学には在籍しました。だから、正確には、七四年卒業です。二年間休学。

三井所　なんで七二年って言ったかと言うと、思い出した。七二年に卒業の人達は、大学に入った時からバリケードなんで、建築の勉強の仕方を教室では殆ど教わってない。それでも、卒業したんですよね。七〇年の卒業生の皆さんは、三年生でゼミやるくらいですから、建築ってどういうものか分かって卒業してるんですけど、七二年の卒業の人達は、全然わかんないで、独学しかなかったと思います。だって、大学では、何も教えていない、という状況でしたね。ちょっと、入学の頃からの話を思い出す事があれば、言ってもらうと面白い事があるかも知れない。

道　田　時代に翻弄された感じですか？

水　口　まさしくその通りですね。私の場合は、入学して、すぐ学生運動みたいな、そういう形で。私は、完全にノンポリでしたし、大学入ると同時に、ジャズをやりたかったから軽音楽部とモダンジャズ研究部という二つのサークルに参加しました。それはそれなりに学園騒動やってましたけど、外ではクラブ活動をやっておりました。軽音楽部も、当時は楽器いじれずに、演奏も出来なかったんですけど、仲間内では活動してました。学術的な話でなくて恐縮なんですが、そういう事で芝浦も好きで愛してましたから、外で少し趣味をやりながら時間繋いで、レポートとか出しながら卒業させていただいたんです。

道　田　ありがとうございました。もし四年間、ほとんど授業が無く、独学で勉強しなくてはならないかと思うと、想像もつかない凄い経験ですね。さて、七四年にバリケード、一般的な封鎖が解除されたという事になっています。その後、目新しいところでは、一九七六年に大学院建設工学が設置されています。私も大学院は出させていただきました。

三井所　私は、ドクターコースを終えて六八年に赴任しました。最初、全然気が付いてないんですけど、卒論の様な研究は、紛争もあったので、あまり良くわからない状況もあったんですが、卒業させてしまうと、また三年生が四年生になって来て、その三年生の終わりの様な四年生の初めの学生に、初めから教えながらやっていかないといけない、っていう事で、物凄くビックリして苦労した感じがありました。

東大では、大学院生が四年生を教育する、という様な仕組みがありました。研究のストックがどんどん溜まって行くんですよね。そうすると先生が比較的、楽なんだけど、それで研究室は、その研究成果が溜まらないと、次に新しい事を教えるという事が出来ない。人が研究した事を、聞いて教える事は出来るんだけれども、自分のところで生み出した情報で教育が出来ない、という事は物凄いハンディキャップという風に思い出しました。それが、先に進みたい学生と教員の双方にギャップだと思いました。それで、私は、七〇年の八月にアルセッド建築研究所をつくったんです。それは、卒業生と一緒に、プライベートな大学院をつくっちゃおう、と思い立ったからです。そして調査した研究を蓄積するノウハウを築いておかないと、次に教える時に消費するだけで疲れてしまうと思いました。それで、設計の大学院というのはどういう意味があるんだろう。計画学の大学院というのは一般にあるんだけど、設計教育が得意な芝浦の大学院っていうのはどういったものなのだろうか？　という議論を嶺岸先生とした事があって、嶺岸先生は四年生までの設計の教育と、その後の設計の教育というのは違う。やっぱり、今までの大学院は、基本的には計画学を教えるところであると。教師になったり設計を教える人のために大学院はある。「これからの芝浦の大学院は、学部よりさらにレベルの高い設計教育をする設計の大学院」というところに意味がある、と嶺岸先生は主張されました。それで、「なるほどなぁ」と思って、時代も豊かになって来た事もあって、大学院で二年、レベルの高い設計の勉強をして、設計事務所や現場に行くという事もあり得る時代になってたので、だから、世の中の貧しさの中で実学を学ぶ建学の精神を、時代に流れの中でレベルの高い設計者を作り出して、世の中に送り出そうと、そういう感じです。

道　田　私の印象では、学部の授業はつまらなかったけど、大学院の授業は面白かったです。小柳津先生の集合住宅論とか、今までの一般的な事を教えるんじゃなくって、自分の好きな事、専門的な事を教える時の話は、先生も生き生きとしていて、凄く面白かった。それで、私は、芝浦の大学院に行って良かったな、と凄く思いました。ですから、個人的には、大学院の設立期の事について気になったのでちょっとお聞きしました。この後、一九九〇年のバブルの時代に突入しています。私は一九八九年入学ですが、加藤さんが、ちょうど二代目の建築会会長に就任された時期だったと思います。

今、私たち建築会常任幹事は月に一回集まって、一時間半ほど会議やって、その後飲みに行くというのが定例のコースでして、そちらから参加する会員の方もいらっしゃるんですけど、悩ましい事に、六八八〇名くらいの卒業生がいても、その内三分の一くらいは住所が更新されていません。また悩ましいことに、毎年の会報と四年に一度名簿を発行するんですが、名簿を後二回発行すると、建築会の資金がなくなってしまう、という課題も抱えています。バブル時代のOB会の様子はいかがでしたか？

加　藤　本日の懇親会出席者は七〇名という事ですが、私の時は二〇〇人集まりました。お金を貯めなければ、ある程度組織化して行かなければと思って集金していました。こんなに参加者が少なくなっているとは知りませんでした。

システム工学科設立、そして豊洲キャンパス移転へ
1993–2006

道　田　リーマンショック以来、会報を出しても広告が取れない。明らかにバブルの時より広告が減りました。豊洲に馴染みがない世代が主だというのもあるのでしょうか。さて学科の歴史ですが、九三年にシステム工学科が設立され、衣袋先生と小坂先生がシステム工学部に行かれましたが、その当時のお話をお願いします。

石　川　システム工学部は、工学部の教育内容を変えようと言うことで、学科再編を小口・十代田といった辺りが働き掛けたんだけど通らない。それじゃあ、新学部をつくろう、と言う事になって、同じじゃ面白くないから、システム工学という名前にした。それで、誰が行くか？　建築工学科の時はジャンケンで決めたけど、今度は口説こうという事になって、加藤さん、小坂、衣袋にお願いした、それだけの話。

道　田　ありがとうございます。今度は、ジャンケンじゃなかった訳ですね（笑）。さて私は大学院卒業の九五年までは田町校舎にいました。入学当初はT定規、そして平行定規と変わり、院生になるとCAD室ができましたので、CADは独学です。不夜城と呼ばれた製図室に籠もって、アナログとデジタルの間で六年間を過ごしました。豊洲校舎には思い入れがないわけですが、二〇〇八年に郷田先生、原田先生といった同世代の卒業生が教員になられて大変嬉しく思っています。田町と豊洲の違い。学生気質の変化といったものをお感じになられていれば、お伺いしたいのですが。

枝　広　田町の泥臭さ。教室に冷暖房もなくて。豊洲はキャンパスらしさはあるけど、研究室で鉄板焼きをやろう

としたらストップが掛かった。電気なら良いと思ったんですけどね。アフター5が出来なくなった。授業も、田町ではPCがなかったけど、こちらでは一人に一台あるんですかね。そうすると、そこに閉じ籠もって外に出て来ないのが多い。また、一つ言えば、飲食店もなくて、コミュニケーションが取りにくい。

道　田　製図室といえば、冬はホントに寒くて、あっちこっちで段ボールの小屋を作り、そこに籠もって、連日徹夜で卒業設計やったのを憶えてます。

枝　広　今でも徹夜はするが、こちらは上品に寝てる。

道　田　田町校舎では大学院生の部屋が製図室の隣りにあったので、必ず誰かに見られてボロクソに言われました（笑）。でも、それが刺激であり、交流になってて、凄く良かった。私はそれに鍛えられました。

石　川　山口ダイスケと言う大学評論家が居て、その彼は、日本の大学は全部見てると言うんだが、その彼が、道田と同じ様な事を言ってた。田町にある頃はモグラの様だった。ところが、豊洲に来てスマートになり過ぎた。あれは芝浦工大ではない。穴ぐらをつくった方が良いと、俺は思っているんだけど、まだ、そこまでは行ってない。

道　田　さて、最後になりましたが、あと二年で建築学科六〇周年。期待をお聞かせ下さい。

三井所　豊洲校舎の植栽に合わせて言えば、樹木が大きくなるには良い土壌がなくてはいけない。芝浦は卒業生が立派。豊洲校舎にはメタセコイアが植えてありますが、土壌を良くしないと。スタートしたばかりですが、豊かな杜森で豊かな人材を育ててほしい。

石　川　大学に泊まり込みたくなるようにしたい。田町では、保健所と消防署がうるさかった。でも、泊まりたくなる様にする事は必要。三浦元秀は、製図板が教室だと言っていた。本館の屋根裏の物置を製図室にした。そういう雰囲気を豊洲にもつくりたいと思います。

加　藤　日経見てたら、卒業生の満足度ランキングが出てました。ここで過ごせて良かったという。そんなランキングはどうでも良いんだけど、卒業生が、「ここで過ごせてよかったな」と言う雰囲気をつくってくれれば良いと思っています。また、卒業生の活躍が大学の地位を上げるので、卒業生が頑張って、地位を上げる努力をして貰いたい。

枝　広　あと一年で退職するのに言うのも失礼なんだけど、芝浦の何が失敗か？　と言うと、先生も入れ替わった事もあり、学生が徹夜してとか、冒険をしてと言うのがなくなり、安定化志向に走っている。私は、ちょっとその辺を危惧していて、いろんな野菜が育つようなのが良いと思う。もう一つは、建築会という立場で言うと、他大学出身の先生を巻き込まないとまずいと思う。今、藤澤先生と堀越先生と南先生が中心的存在だけど、今後、建築会に出て来て貰うようにしないとダメだと思う。それでなくては長続きしない。諸先輩の意見をいただいて、最低二〇〇人は集めて、これを毎年やられようとしているようなので、継続していただきたいと思います。

道　田　次回は二〇〇名を目標にしないといけませんね。本日は長時間ありがとうございました。

（二〇一二年十二月八日芝浦工業大学 豊洲キャンパスにて）

『芝浦工業大学工学部建築学科 設立60周年記念式典・祝賀会』のお知らせ

拝啓

卒業生の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。 この度は、標記の件について、建築学科及び建築会が中核となって実行委員会を立上げ、『設立60周年記念誌』を発行するとともに、『記念式典及び祝賀会』を企画・実施することになりましたので、お知らせ申し上げます。

既にご承知のように、1954年に建築学科が設立されて以来、本年2014年に設立60周年を迎えることができました。その間、大宮キャンパス開校や大学紛争及び豊洲校舎移転などもありましたが、皆様は多くの師や友と出会い、建築学を学ぶとともに課外活動を行い、卒業後は社会・職場等で助け合ったことと思います。そこで、設立60周年 を迎えた本年、これまでの足跡を振り返り、建築学科の近況を知って頂くと共に、卒業生相互の久闊を叙し、合わせ て卒業生の社会活動の一端を紹介しつつ、将来目指すべき建築学科像につい て、教育と人材輩出の面から描いていきたいと思っております。また来年3月刊行予定の記念誌では建築学科60年分の歴 史や情報、教授や卒業生の思いに加え、記念式典や祝賀会の模様も掲載予定です。最後になりましたが、本事業へのご理解と寄付をお願いしております。万障お繰り合わせの上、ご参加・ご協力いただきますよう重ねてお願い申し上げます。

敬具

芝浦工業大学工学部建築学科・設立60周年記念事業実行委員会
実行委員長　名誉教授　枝広英俊

付記：建築会学年幹事の皆様は「平成26年度　学年幹事会」よりご出席下さい
　　卒業生の皆様は「第11回 建築会総会」よりご出席下さい

記

2014年12月13日（土）開催
『芝浦工業大学工学部建築学科 設立60周年記念式典・祝賀会』

□平成26年度　学年幹事会　　／12時30分～13時00分　豊洲校舎交流棟6階大講義室
□第11回建築会総会　　／13時00分～13時30分　同上
□建築学科 設立60周年記念式典／13時30分～16時00分　豊洲校舎交流棟6階大講義室
（OB教員挨拶、卒業生と現役教員による座談会「卒業生が語る建築学科史」を開催予定）
□祝賀会／16時30分～18時00分　豊洲校舎交流棟3階生協にて

会費・支払方法

■記念式典・祝賀会参加費：8,000円／記念誌一冊・送料含　　＊当日受付で支払
■記念誌代：3,500円／一冊・送料含　　＊専用口座に振込
■寄付金　：一口5,000円より／記念誌に卒業年と氏名を掲載　＊専用口座に振込
注）記念誌は2015年3月末に刊行予定

参加申込方法・専用振込口座　**＊いずれも11月21日（金）〆切**

記念式典・祝賀会への参加、記念誌の購入、寄付金にご協力頂ける方は、同封のハガキに必要事項を記入の上、郵送、FAX、メール（ハガキと同じ内容を明記ください）のいずれかでお知らせ下さい。それぞれの支払方法についてはハガキに明記してありますのでご確認ください。

芝浦工業大学工学部建築学科・設立60周年記念事業実行委員会
〒135-8548　東京都江東区豊洲3-7-5　建築学科事務室内
E-mail：archi60@arc.shibaura-it.ac.jp ／ FAX：03-5859-8401
記念誌および寄付専用口座：三井住友銀行　築地支店　普通口座 7485590
名義：芝浦工業大学工学部建築学科・設立60周年記念事業実行委員会　代表 志村秀明

二〇一五年度　会費納入のお願い

二〇一四年度決算は左記の通りとなりました。ここ数年、会費納入率は徐々に改善されてはおりますが、いまだ低調なまま推移しています。本年も引き続き、建築会の活動ならびに会報の刊行費用などに、皆様のご理解とご協力をお願い致します。

同封の郵便振替用紙で、年会費／二千円をご送金ください。郵便振替用紙には氏名と共に、封筒の宛名欄に記載されてる会員番号もご記入ください。住所や勤務先などに変更があった方は、名簿のデータを更新致しますので、通信欄にその旨をご記入ください。また、名簿への非掲載をご希望の方は、備考欄にその旨をご記入ください。

なお、六〇周年記念誌の購入代金や寄付金の振込先は別口座（P11 参照）ですので、お間違いのないようにお願い致します。

編集後記

本号もお忙しい中、ご協力くださった卒業生を始め、先生方、関係者の皆さまに心より御礼を申し上げます。例年とは異なる装いの「建築学科設立六〇周年記念特別号」はいかがだったでしょうか。建築学科設立当時からの歴史を整理し、これから先の建築学科に思いを馳せたいと始まった六〇周年記念事業ですが、今号ではイベントや祝賀会に先立ち、二年前に実施したプレイベントの概要を掲載させて頂きました。活字で読み返すと、パネラーの皆さまのお話はどれもイキイキとしていて大変面白く、貴重な記録になりました。会報でもお知らせしておりますが、本年十二月十三日（土）は例年の同窓会や総会とは異なる特別の集いになりそうです。この記念すべき日を、皆さまと一緒に祝うことができるのを楽しみにしております。また、上記のイベントの他に、もうひとつの記念事業である「六〇周年記念誌」が来年三月の刊行に向け、現在編集中です。お手元に届いた際には、ぜひ今号と合わせてお読み下さい。

道田淳（一九九三卒）

個人情報の取扱について

二〇〇五年四月一日より「個人情報の保護に関する法律」が施行されました。本建築会におきましても会員の個人情報（氏名・自宅住所・郵便番号・電話番号・勤務先名・勤務先電話番号等）につきましては、芝浦工業大学建築会会則第八条により、厳重に管理しております。

第八条（個人情報の取扱）

（一）建築会の個人情報は以下の目的に使用する。

一．芝浦工業大学建築会「名簿」の作成資料

二．建築会会報の送付

三．建築会関連の案内

四．芝浦工業大学からの案内、連絡事項など

五．会員による同期会等の連絡

（二）会員から提供された個人情報は上記利用目的の範囲を超えて利用しない。又収集した個人情報の利用、提供には厳正な管理の元「本人の同意がある場合」又は法令等で要求された場合」を除き、第三者に開示、提供しない。

（三）名簿作成に当たり氏名以外の個人情報（住所・電話番号・勤務先）削除の要求がある場合はその趣旨申し出により名簿から削除する。

（四）会員個人情報の管理は建築会事務局が一括して行う。

お問い合わせ　学校法人芝浦工業大学建築学科内建築会担当

〒一三五-八五四八　東京都江東区豊洲三-七-五

TEL. 〇三-五八五九-八四〇〇

FAX. 〇三-五八五九-八四〇一

2014 年度　会計報告　（2014.7.31 現在）

収入	繰越金	普通貯金	44,772
		普通貯金（支出対応口座）	190,761
		普通貯金（会費受入口座）	2,434,770
		現金	0
		（小計）	2,670,303
	会費	年会費振込	951,000
	広告料	会報広告収入	0
	雑収入	総会会費残金	0
		郵便貯金利子	0
		（小計）	951,000
	計		¥3,621,303
支出	会報第29号印刷費（総会他案内印刷・封筒印刷・他）（発送料）		729,960
	ホームページ維持費		113,615
	事務費	通信費	0
		振込手数料	840
		事務用品費	0
	計		¥844,415
次期繰越		普通貯金	44,772
		普通貯金（支出対応口座）	94,195
		普通貯金（会費受入口座）	2,652,970
		現金	0
	計		¥2,791,937
支出＋次期繰越金			¥3,636,352

建築会ウェブサイト

http://sit-arch.com